就職間際の私のオーストラリア紀行

若　　者

山　崎　　晃*

就職間際の外国旅行に，何故オーストラリアを選んだのか？　学生時代，ずっと外国旅行にあこがれていた私だが，それは実現しない夢だと自分に言い聞かせてきた．しかし，本年4月より故郷の富山県に帰り，県庁に勤務することが決まってから，人生の新たな出発を前に，また学生時代の最後の記念として，ぜひとも外国を旅行してみたくなった．それも忙しい日本での毎日を離れて，気候・風土・生活様式が日本と全く異なる土地で，自由気ままに「旅」してみたかった．そこで私はあえて日本の反対側の国オーストラリアを選んだ．それは，オーストラリアという国が，広大な国土と豊富な資源を持ち，そこでは人々がのんびりと暮らしているという，オーストラリアを訪れた先輩の話が強く心に残っていたためである．それに，汽車旅行の好きな私にとって，大陸での長時間の汽車の旅にも心が魅かれた．

2月19日，ついに私はオーストラリアへの旅に出た．不安と期待とが入り混った快い緊張を胸に，私を乗せたジェット機は，伊丹空港を飛び立ったのである．

首都シドニーに着いて，同行していたツアーの仲間とも別れ，最初に訪れたのが，シドニーの北西，列車で6時間の距離にあるヴィロウトリで，私はそこの農場で5日間ファームステイを体験した．オーストラリアでは平均的な農場であると聞いたが，私にとって，ステイの間中

図1　オーストラリア旅行の行程図

*山崎　晃（Akira YAMAZAKI），富山県庁土木部施設管理課道路維持係．昭和57年大阪大学工学部環境工学科卒

写真1　ファームステイの家族とともに

写真2　牧場の牛たち

見る物，聞く物すべて，もうただ驚きの連続であった．農場の広さは，2400 ha で，これを3つに分け，最初の年に小麦あるいはとうもろこし（sorghum であって cornではない）を作り，次の年は休耕にし，牧草を成育させ，3年目は放牧（cow）にして，牛の屎尿等によって土づくり，という自然のサイクルをうまく利用した三甫式農法を行っている．そのため，日本の様に肥料や農薬を散布する必要がないとのことである．また畑では，あらゆる種類の作物を作っている．日本と違って季節にあったものを作り，それを自家で食べている．ともかく自給自足の考え方が行き渡り，食べるものはすべて家で作るため，食費とはバターやジャムのたぐいだけである．これら全て広さのなせる技なのであろうか？　私の家も農家であるため，農場の人に，私のファームではこういったものを作っていると話したのだが，彼らに言わせると，動物のいないのはファームではなくてプランテーションだということであり，100 ha 以下はファームではなくてガーデン（庭）であるとのことである．また日本の場合，米を売っているのだから，それはマーケット・ガーデンなのだそうだ．ともかく，とほうもない大きさに圧倒され通しのファームステイ第1日目であった．

2日目からは，農場の仕事に追いまわされる毎日であった．朝は牛にえさをやり（普段はやらないが，今年は干ばつのため），続いてトウモロコシ畑のウィンクラーを移動させて，朝の仕事は終わる．午後は，牛を牧場から牧場へ移動させたり，小麦畑を耕したりで1日が終わる．日本の農家と違って，朝早くから晩遅くまで働いているという様なことはなく，日曜日は完全休業であるし，平日も朝は8時から夕方は5時までしか働かず，夜は家族団らんに楽しい時間を過ごしている．

慣れない仕事にとまどっていた私によくなついてくれたのが，ここの農場で飼っている犬である．立つと私の肩に前足をのせられる程大きい犬で，しかも私のたどたどしい英語でもよく理解してくれた．“Stop”と言えば止まるし，“Stay here”と言えば，すわって次の命令を待っている．牧場では，牛を移動させるため，駆けまわり，人間をはるかに勝る働きをみせてくれた．この広い牧場を少人数の家族で管理するために，この様な賢い犬が必要なのであろう．

オーストラリアへ来てすぐこの農場に来たため，最初の頃，私の英語は彼らに全く通じず，また彼らの話しも理解できなくて，ものすごく不安になった．普通の英語でもわからないのにオーストラリア特有のなまりが強いときている．とにかく，today（トディ）がトダイなのである．またこの家の奥さんの英語が私に対してはほとんどが命令形であるのにも驚いた．

農場での食事は，家族といっしょに奥さんの手料理をいただいた．私はオーストラリアという国の大きさから食事もさぞ量の多いぜいたくなものを予想していた．しかし，出された朝食など，ハムと卵を焼いた，文字通りのハムエッグとパン1きれということもあり，夕食も日本と比較すると質素なものであった．日本の食事に慣れていた私にとって，この食事では量が少なすぎて，日夜空腹感にさいなまれた．イギリスの統治下にあったオーストラリアでは，イギ

リス人特有の食事の慣習（少食）が広く普及していたのであろう．

苦しいながらも楽しかった農場をあとにして首都のシドニー，そしてメルボルン，アデレードと私の「旅」は続いた．

シドニーでは，多くの日本人に会い，特に観光地では，日本人の新婚さんをよく見かけた．これでは何のために遠くオーストラリアまで来たのかわからない．私は日本人を避けるべく，駅に向かった．駅で列車を待つこと1時間．列車は影も形も現わさなかった．待っている人々は，のんきにタバコを吹かしている．私は我慢しきれずにそのうちの1人に，いつ列車はくるのかと尋ねた．その人の話によると，オーストラリアの列車はスピードが遅く，時刻表はあってない様なものであり，2～3時間の遅れは日常茶飯事だそうである．また出発も2時間ぐらいは平気で遅れ，逆に30分程度早く出ることもあるらしい．汽車旅行の好きな私も，これには少々閉口したが，お国柄であろうか，誰一人文句を言う人がいないのである．

農場で味わった空腹感をいやすべく入ったレストランでは，大食漢を誇る私も大いに驚いた．都会の人々のちょっとした昼食は，ハンバーガが普通で，これは私でも充分食べられる量なのであるが，ここのレストランで，普通の大きさ（ミーディアム）のパイといってたのんだ時に出されたものは，直径約30cm，厚さ数cmもあり，これは本当にミーディアムなのかと尋ねた程である．案の定，半分ぐらいしか食べられなかった私は，残りを Take away（お持ち帰り）にしてもらった．これはどこの店に行っても同様であった．以後の旅行中，レストランでは，常にスモール（小）を忘れなかった．

アデレードからは，次の目的地アリススプリングに向かった．この列車の中で，オーストラリアのある婦人とじっくり話す機会に恵まれた．40才前後であろう彼女は，自分の結婚当時の生活について私に語ってくれた．彼女の新婚生活は，安い，電気もない部屋から始まったそうであるが，夫婦で一生懸命に働き，5年後には早くも郊外に家を建てたということである．日本では20～30年間，身をすり減らして働いて

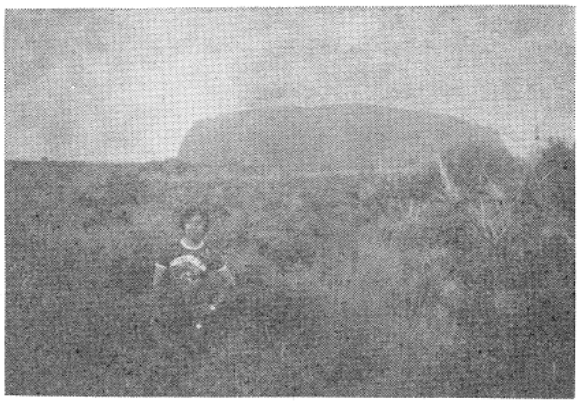


写真3　エアーズロックの夕焼け

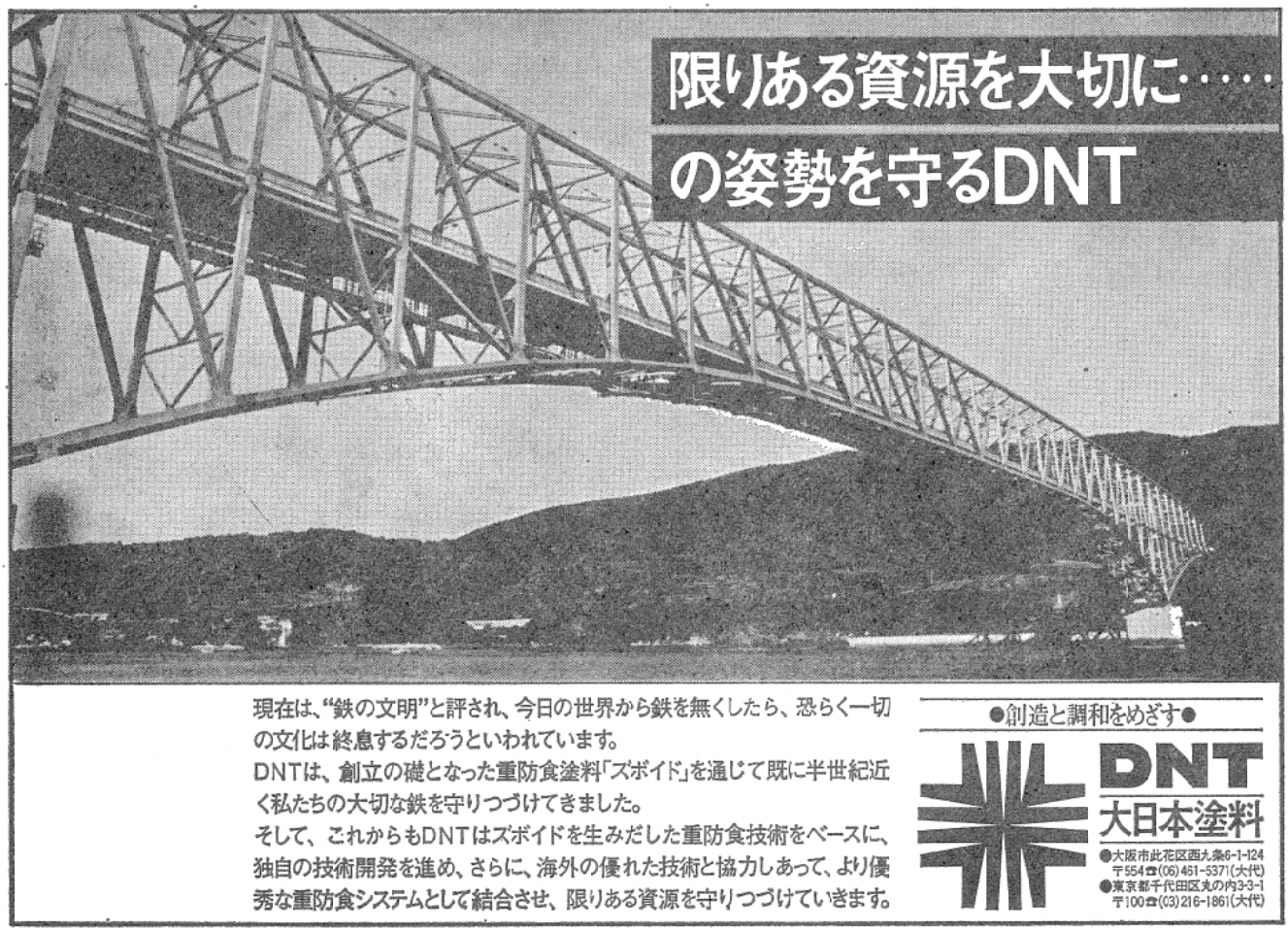
やっとという程度の家は，オーストラリアでは，5年ぐらいで普通建てることができるのだそうだ．日本では夢物語となる様な話を聞きつつ，列車は砂漠の中を走りアリススプリングに着いた．

アリススプリングからは，今回の旅行の最大の目的であるエアーズロックへ向かった．

エアーズロックは，砂漠の中にある巨大な一枚岩でできた偉大なる自然の構造物である．一日のうちに太陽の高度によって，色が様々に変化する．特に朝日，夕日で染まったエアーズロックは美しいというより荘厳であった．原住民のアボリジニが聖地として崇めているとのことで，私もこの自然の造形美に神秘的な何かを感じずにはいられなかった．現政府もここを聖地として大切に保存しており，観光客も制限しているようである．しかし，年間10人余りの人が転落死しているとのことであり，日本の様に柵やチェーンをはりめぐらすという安全第一の考え方ではなく，各々の責任で登ぼり，万一事故があっても管理者の責任は問われないというオーストラリア人の考え方に，個人主義の片鱗を見た様な気がする．

エアーズロックに別れを告げ，アリススプリングを発った私は，ケアンズ，ブリスベーンに立ち寄った後，シドニーに帰り，今回の私のオーストラリア旅行は終わった．

名所旧跡をなるべく避け，人々との触れ合いを目的にした私の旅は，広い国土に育ったオーストラリアの人々の心の大きさ，自由さに圧倒され通しであった．人は皆，非常に親切で，Excuse me と言えば，相談にのってくれない

人はいない．特に田舎では，親身になっていろいろ世話をしてくれた．この様な人々と自然の中で過ごす機会を得たことに感謝するとともに，約1カ月ではあるが，私自身が少し，大きく成長したように思われる．

読者の方々も一度オーストラリアを訪れることを私は勧めます．一週間程度で大都市だけをまわってもオーストラリアの本当の良さはわかりません．田舎に行くことです．きっと日本では得られない新たな視野が開けることと思います．